

「クロンチョンとダンドウツ(1)」(2021年02月09日)

ライター：音楽・演劇・詩・散文・造形・映画など多能芸術家、ヤピ・タンバヨン

ソース：2000年1月1日付けコンパス紙 “Keroncong, Dangdut, Prejudis, Kekuasaan”

ここで述べようとしているのは、常に権力者の好みや限界あるいは政治思想による価値付けによって干渉され続けて来た、西と東の文化的結び付きとしてのインドネシア音楽発展史である。一方、確固たる民族文化樹立への憧れに駆られたモダン芸術への指向を導くその結び付きの裏側には元来、この国を支配した西洋民族の長い歴史の中に展開された自然なプロセスがあった。

しかし現実に西と東の差異はまた、政治ツールのもっとも劇的な、植民地支配への反抗・扇動・アジテーション・情熱を掻き立てるパトスにもなった。そして不幸にも、植民地支配という言葉が常に、敬虔派的宣教活動の特徴に重点を置く過去の世紀のキリスト教宗教活動への誤った関連付けの痛ましい記憶から免れることもなかった。そこでは、真理へのひとつの道を信じる個人の決定に対する安全の意味が傲岸な西洋的性格に彩られ、一個人の精神的完璧さの原理が精神上で西洋的になることだけに置かれたのである。

その種の証拠はインドネシア東部地方のマナドやアンボンで行われた19世紀の宣教活動に明白に表れている。一方のインドネシア西部地方では同じ世紀の初期に、アラブの地で起こったワハブ派運動に倣うペディールからボンジョルに至る三人のハジによってなされたイスラム純化原理の進展が起こった。教義に背いて暮らしの中で行われている麻薬や飲酒その他の背徳行為といった悪徳の撲滅である。そのふたつの要素が19世紀末のクロンチョン keroncong 音楽の存在に大きな意味を投げかける影響力を作り出した。その時期、クロンチョン音楽者たちは moritsku や moritsko という謎言葉を標準的に用いていた。

モリツクやモリツコというのは15世紀にポルトガルやスペインで盛んになったモール人の舞踊リズム moresca に由来しており、16世紀にそれはオランダでも知られるようになった。モレスカという言葉の裏には怖ろしいほどに研ぎ澄まされた宗教感情が込められていることを現代クロンチョン音楽者たちはもう忘れてしまっているだろうし、気にも留めないだろう。このリズム

にはふたりの剣士による剣舞が描き出されているのだ。ひとりにはイスラム教徒、もうひとりにはキリスト教徒で、それぞれが自分の信仰を死守しようとして決闘するのである。その舞を催した者がそのどちらを勝たせるかを決めているのは、想像にあまりあることがらだ。

だからクロンチョンモレスカが偏見をその軸に置いていることは言うまでもなく、その結果、害をもたらすものだという根拠に使われることになった。ましてや、クロンチョンはその当時 Tanah Serani と呼ばれた現在のジャカルタ北部にあるトゥグ Tugu 地区で生まれたことを忘れてはならない。そこはカトリック教徒ポルトガル奴隷がプロテスタントに移ることで奴隷から解放されたマーダイカーコミュニティの中心地なのである。トゥグコミュニティがポルトガル人の子孫であるというクロンチョン研究家たちの結論は正しくない。かれらはゴアやマラッカを出自とするアジア人だったのであり、ポルトガル人が彼らを奴隷にし、そしてカトリック教徒に変えたというのが真実だ。そしてオランダがかれらを自由人にしたとき、かれらは元の主人だったポルトガル人のファミリーネームを使うようになったのである。

オランダはそのトゥグコミュニティを管理して排他的な所属集団にし、結果的にその外に置かれた社会からのかれらに対する妬視と反感を招いた。日本軍政期にフィサビリラを名乗るタンジュンプリオックからやってきた正体不明の集団がトゥグコミュニティを襲撃し、住民を殺りくしてまわった事件の裏にはそれがある。

1920年代に Lief Indie オーケストラの著名バイオリニストでクロンチョントゥグ楽団を強化した経歴を持つエディ・ウォッシュは、都庁文化局が主催したブタウィ伝統芸能保存プロジェクトの民族音楽調査スタッフを務めていた筆者に次のように語った。「トゥグの虐殺事件はトゥグコミュニティが奉じている宗教に対する怒りの感情に加えて、クロンチョン音楽者に与えられた buaya keroncong という俗称がもたらしているイメージのために、かれらの文化産物であるクロンチョンが倫理を損なう極端に世俗的なものと解釈され、それが生み出したネガティブな感情がそこに入り混じって起こったものだった。」

明らかにそこには個々に独立したふたつの感情がある。ひとつは、オランダが育てた排他的キリスト教がクロンチョンとブアヤクロンチョンを作り出したというもの。もうひとつは、クロンチョンそれ自体がイスラムの社会倫理を打ち壊すキリスト教の産物だというものだ。[続く]

「クロンチョンとダンドウツ(2)」(2021年02月10日)

クロンチョンが隆盛を極めた時代を体験しなかったひとには、そのような見解を受け入れることは困難だろう。しかし1951年に出された論評は多少ともその見解との一致を示している。インドネシア共和国が完全主権を得てやっと一歳になったその年、クロンチョンは国民芸術という枠の中でたいへんな意味を持つ文化現象として受け入れられた。メステル・スマナンの率いる週刊誌 Nasional の第2年第42号の文化欄にキ・ハジャル・デワントロが書いたコラムがそれだ。引用すると：

当時、クロンチョンはインドネシア音楽の中で最も弱いジャンルをなしていた。...

(1)女性歌手たちの出身環境が高尚でなかったこと(2)男性歌手たちが女性への媚態を歌唱の中に込めたこと等(3)強請り・強盗・スリなどを意味するブアヤクロンチョンなる言葉の存在などのゆえだ。反対に、あまりにも西洋音楽に引きずられているとインテリ層を非難する者もいた。...

その論評に見られるのはクロンチョンに対する単なる批評でなく、拒否なのである。しかも音楽それ自体に備わったメロディ・リズム・ハーモニーの一体感が生み出す音楽性の表現に対するものですらなくて、音楽がもたらす副次効果に向けられた拒否なのだ。

問題の中心に置かれているブアヤクロンチョンという言葉は、19世紀末に名を上げたクロンチョンバンド De Krokodilen に由来している。クマヨランの Indo(オランダ系ユーラシアン)たちが編成したこのバンドは演奏の巧みさと、心と肉の男女関係を歌い上げる歌詞で若い娘たちをとりこにした。その伝説は語り継がれて、インドネシア共和国の揺籃期にまで社会記憶が持ち越された。それがために1950年代ですら、街中を流して歩く巡回バンドが自分の家のある路地に入ってきたら、すぐさま窓を閉める親が大勢いた。自分の娘が窓から飛び出してあのブアヤたちを追いかけるかもしれないという不安に取りつかれたのだろう。

クロンチョンが元ポルトガル奴隷のコミュニティで生まれたとはいえ、多くのひとびとが思っているような、クロンチョンがポルトガル由来のものであると言う説には同意できない。インドネシアの地にポルトガル人がはじめてディアトニックをもたらしたというのは正しい。事始めは153

5年のアンボンで、ポルトガル人が原住民のための学校の必要性を感じたとき、フランシスコ・ザビエルがその文化活動の礎石を築いた。かれはカトリックの聖歌 Ave Maria、Doa Bapak Kami、Kredoなどをムラユ語で歌わせた。だが西と東の結びつきであるクロンチョンは完全にプロテスタントの特徴を持っていると言わねばならず、それはつまりポルトガル系でなくてオランダ系になっていることを意味している。その証拠はクロンチョン音楽自身が持っているコード式和音進行に見ることができる。トニック・ドミナント・サブドミナント・ダブルドミナントの四つによって和音進行が展開されているのだ。このコード式和音進行がプロテスタント教会コーラスの、もっと言うならルター派聖歌音楽の特徴であることは否定できない。プロテスタント教会コーラスは、バッハやベートーヴェンに倣ったパレストリーナの様式に見られるカトリック教会のラテン語聖歌ほど難しくない。マルティン・ルター自身がこう語っている。「愛についての聖書の教えを心に行き届かせるために、礼拝音楽は簡単なものにしなければならない。」

和音進行の点以外にも、愛の表現について神学面から見た逸脱が目立つ。愛に関する表現は元々精神的な面だけが本質とされていた。ところが、それが肉体的なものに変わっている。

クロンチョンの歌詞として典型的な表現、あるいはクロンチョンの魅力を生み出している言葉として indung disayang、sayang disayang、またポピュラーな aih zoetelief という艶っぽいシャウトなどが存在している事実がある。それらは人間と神の関係の中で愛されることを願う表現パターンだったものが、カトリック＝プロテスタント典礼の伝統の中で憐みを乞う表現に変化した結果だ。

つまり、昔その表現は Kyrie eleison(神よ、われわれを愛し憐みたまえ)だったものが軽い Aih zoetelief, sayang indung disayang: kekasihku kasihi dan kasihanilah daku. というものになったということだ。意気地なしの印象は別にして、これは心を酔わせて誘惑することにかけて比類ない能力を持つものだったのである。[続く]

「クロンチョンとダンドウツ(3)」(2021年02月15日)

長期に渡ってそのようなパターンがクロンチョン音楽の歌詞に塗り込められた。20世紀半ばになって日本軍がインドネシアを占領してから初めて、sayang-sayang だらけの歌詞になって

いるクロンチョンの歌を啓民文化指導所が禁止した。sayang-cinta-kasih は西洋のものであり、植民地主義に抗争するための闘争意欲を軟弱にする、というのがその理由だった。そのため、日本軍の希望に合わせて歌詞のたいへん口語的な Suci や Hanya Engkau が作られた。

禁止、禁止、の先例は共和国独立後のインドネシア大統領たちに継承された。初代大統領はそれを行ってインドネシアポップ音楽に見せかけのナショナリズムをもたらした。かれ自身が名付けたガッキゴ音楽という西洋帝国主義の産物に反抗することに関して、かれは民族パトスを利用するのに成功している。第二代大統領は情報大臣を通して、たいへんな騒ぎとなったテレビからの泣き虫・弱虫・意気地なし追放を行った。第三代大統領はまだ研究技術開発大臣時代に、ある種の音楽を禁止するよう求めた。

発展途上国の指導者の器量は劣悪なものであるために、個人的なフラストレーションが国民社会に向けられ、国民はそれを正しいものとして受け入れなければならないものになっているのか、という僻見が湧いてくる。しかし実際には、アメリカのセクトであるイエホヴァの証人の公認機関紙 Awake の1999年10月8日号に、社会規範から見てわいせつであるとしてアメリカの地方判事がラップ音楽を禁止したことが報じられていた。

それなのだ。好みや世代の相違が政治問題にされて先鋭化するがためにしばしば音楽の発展に対して偏見が起こることが本論の冒頭で述べた問題の本質なのである。西洋で偏見は、文明を整える原泉としての教会が否定するものという形でモラルの鎧をかぶせられる。一方、インドネシアではきわめて単純で、西洋文明は背教的・倫理崩壊・無益、そしてもっとも浅薄な憶測がキリスト教化。もし西と東の結合現象が社会の特定階層、たとえば一般大衆層に起こった場合はまた違ってくる。そこには宣教方針に関連付けたアポロギアが組み立てられる。つまりムラユ・ジョゲツ joget・ガンプス gambus にハードロックが加わった西と東の結合体であるダンドゥツ音楽がそれだ。ほとんどの歌手はこれ見よがしの節度のない姿で登場し、官能的でエロチックな動きを武器にしてエクスタシーに向かうにもかかわらず、ダンドゥツに対する拒否はまったく起こらない。そして奇妙この上ないことに、そのようなものが支配者に抱きかかえられ、支配政策のために利用され、政党プロパガンダのツールにされるのである。

それに関する鮮烈な記憶としては、ある知事がダンドゥツを録画したのにはじまり、内務大臣が独立50周年のダンドゥツ大ページェントをバックアップしたことに続き、オルバレジームの終

末期にダンドウツの王と呼ばれるアイドルを国会議員に据えるに至ったことがクライマックスになった。

ダンドウツという言葉自体、元々はオルケスマラユ orkes Melayu がマージナルな存在から勃興して1960年代末にレコーディング界を支配下に収めた動きに対してロック音楽者たちが与えた冷笑的な言葉だったのである。マラユ音楽自体に対する偏見は独立初期から広がっていた。1951年に国営ラジオ局RRIがインドネシアの音楽発展のバロメーターであると言われていた Bintang Radio 第一回コンクールを開催したとき、制度的条件を満たす妥当な分野としてクロンチョン・ヒブラン hiburan・セリオサ seriosa の三つだけが取り上げられた。[続く]

「クロンチョンとダンドウツ(4)」(2021年02月16日)

そこに差別があったのは明白だ。なぜなら青年の誓いから独立宣言までの間にインドネシアで発展した西と東の融合音楽は、アミール・パサリブによればクロンチョン・スタンブル stambul・ガンバン gambang・ガンブス・ジョゲツ・ランガム langgam の6種類があったのだから。

インドネシアにある、ありとあらゆる音楽現象の中で西と東の結合が自然発生的に起こったのは、多分技術的にあれこれとこねくりまわした結果できあがったものと言う方が当たっているだろう。そんな場では必ず実在物ができあがるのだ。たとえばオクターブを5等分したペンタニックのスレンドロをピアノで再現するのは、該当する黒鍵に同じ周波数の音がないのだから不可能に決まっている。ところがカンクンを炒める際の水と油を混ぜるスタイルで化合物を作り上げることができるのである。こうしてインドネシア音楽はあちこちでゴミ扱いされ、こっちでも向こうでも肥溜めにたとえられることになった。

スタンブルを例にとると、その語はイスタンブルを語源としており、第一次大戦前にはイスタンブルがインドネシアショー芸能のメッカと目されていた。インドネシアのショー芸能にトルコが与えた影響は実際のところ、kemidi stambul や opera bangsawan と呼ばれる音楽演劇の中で、貴族がその妃に対して抱く欲望の物語を参考にする程度のものでしかなかった。トルコへのそ

の憧れは戦前に人気を高めた Opera Dja'fat Toerki や Dardanella などの劇団名が物語っている。

スタンブル音楽は独特のセレナードであり、スタンブル1はトニックコードで始まり、スタンブル2はサブドミナントコード、スタンブル3はドミナントセブンからトニックに移る形で始まる。それぞれのスタンダードとしては、1がポルトガル曲 Haja Luz のメロディを借用したミナハサの Inani Keke やティモールの Bolelebo で、ボレレボはワゲ・ルドルフ・スプラッツマンが Ibu Kita Kartini に改造した。2はマルクの Kole-Kole、3はブタウィの Keroncong Kemayoran だ。

ガンバンの音律は中国音楽の影響を受けている。主にメロディを担当する筆頭楽器ガンバンはシロフォンのような木鍵打楽器で、中国語で黄梅調 huang mei tiao と呼ばれるスレンドロに似たペントニックスケールを持つ。スタンダード曲は Jali-Jali だ。ガムランのボナンに似たクロモン kromong という名の楽器がたいてい添えられる。その他にガンバン楽団を構成する楽器には、さまざまな形をした中華風ルバブである teh-yan、kong-ah-yan、su-kong などもある。1980年代に流行した曲 Madu dan Racun は黄梅調のガンバンがフィーチャーされている。

ガンブスはまた違う。ガンブス楽団には必ずリュートの仲間の撥弦楽器がいて、アラブやパレスチナではウード al'ud と呼ばれている。主旋律や対旋律はウードが受け持つ。しばしばリズムが前面に押し出されて十数種のマルワス marwas という膜鳴楽器が合奏する。ブタウィで花嫁花婿行列や割礼の祝いの行列で使われるクティンプリン ketimpring のようなものだ。

場所によってガンブス楽団は zafin や dehefeh などの舞踊の伴奏をする。ユニークなのは、第二次大戦前の時期にかれらはボレロやビギンなどのラテンリズムをスタンダードにし、バイオリン・アコーディオン・コントラバスを中心楽器に加えていたことだ。

ジョゲツについては、しばしば langgam Melayu や irama semenanjung などの異名でも呼ばれた。semenanjung とはマレーシアの旧名マラッカ半島 jazirah Malaka のことだ。ブタウィでのものは orkes samrah に典型を見ることができる。その楽団で中心楽器になったのは、今はもう製造されていないと思われる小型キーボードのハルモニウム harmonium (かつてフランスでは orgue expressif と呼ばれた) で、他にバイオリン・ギター・ベースおよびマラカスやクラベスのよ

うなりズム楽器で編成されていた。[続く]

「クロンチヨンとダンドウツ(5)」(2021年02月17日)

最後にランガムだ。ランガムは多分インドネシア音楽の中でもっとも長命で、しかも一番西洋かぶれしたものだろう。インドネシア音楽はこのランガムから次のヒブランの時代へと続いて行ったのである。hiburan とは英語の entertainment あるいは amusement の訳語である。ダンス伴奏のための、ボールルームフロアにつきものの音楽がそれだった。それが1960年代にポピュラー音楽になっていった。

ランガムとはティンパンアレイ Tin Pan Alley とハワイアンとクロンチヨンが融合したものだ。ティンパンアレイというのはニューヨークのブロードウェイの一地区から採られた名前、演劇音楽の一種であり、ハリー・フォン・ティルザーが1905年に作った Wait till the sun shine, Nellie にヒントを得たものだ。この歌はインドネシアで大流行し、1920年代までスタンダードの地位を維持した。ワゲ・ルドルフ・スプラッマンとかれのジャズオーケストラ Black and White がマカッサルのボールルーム Kazerne で、ベローニ Belloni とかれのオーケストラ Concordia Respavae Crescunt がバンドンのハルモニ社交場のダンスフロアで演奏した。このダンス音楽のジャンルは更に、1918年にインドネシアで流行ったビリー・バスケットとジョセフ・サントリーの曲ハワイアンバタフライをきっかけにしてスライドバーを使う電気式ハワイアンギターを加えるようになった。

二度の世界大戦の合間の時期にジャカルタのエンターテインメント世界をリードしたスターたちは楽器演奏にかけて比類ない腕前を持つ東部インドネシア出身のミュージシャンたちだった。かれら東部インドネシアの諸種族は19世紀に教化育成されてオランダ植民地を維持するのに協力する同化種族というステータスを与えられ、オランダ人にエリートとして遇された種族だったのである。マナド人やアンボン人の著名ミュージシャンに Hein Turangan、Etto Latumeten、Nico Mamahit、Tjok de Fretes、Jacob Sigarlaki、Boetje Pesolima、Tjok Sinsu らがいる。

同化エリートという立場が偏見を生んで怨恨に向かい、その者たちが作る音楽が非エリートから憎しみと怒りを浴びたのは、起こるべくして起こった当然の成り行きだったにちがいない。理由は簡単だ。その音楽が、植民地支配下に置かれ、生活苦にあえぎ、貧しく、飢えているインドネシアの一般庶民大衆の現実生活に根ざしたものでなかったためだ。

それはオランダ人やオランダ系インドがあちこちのボールルームでダンスし、オランダ語でペラペラとおしゃべりするような場所での音楽だったのだから。そのパラドックスが戦前の時代にランガムについて cincang babi 音楽という蔑称を生み出し、それは1950年代まで続いた。それはふたつの意味を持っていた。ひとつは意味不明な面白おかしい音として、もうひとつはハラムだ。

ランガムとクロンチョンの境界線ははっきりしない。第一回 Bintang Radio コンクールが開催された1951年に主催者が三つの音楽ジャンルをクロンチョン・ヒブラン・セリオサという名称で標準化する前、ダンスがランガムとクロンチョンを区別する基準にされていた。そのためにダンスのリズムの名前でランガムを呼ぶことがしばしば行われた。クロンチョンタンゴ、クロンチョンルンバ、クロンチョンフォックストロットがそれだ。タンゴはアルゼンチンのダンス音楽、ルンバはキューバの、そしてフォックストロットは米国のダンスリズムである。

最後に、クロンチョンフォックストロット、クロンチョンルンバ、クロンチョンタンゴに対する偏見がそれら音楽演奏者たちの振舞いに根ざしたものであった点に注目することも重要だろう。そのエリート階層には表立った高慢さ、西洋化したプリブミ階層の地位がそうでない階層より高く優れているという植民地的傲慢さが培われた。かれらはただペラペラ言葉をしゃべり、ボールルームでダンスし、ビールを飲むというだけのことでインテリ・モダン・教養があるという賛辞を与えられたのである。[続く]

「クロンチョンとダンドウツ(終)」(2021年02月18日)

かれら自身も逆に、同じような行動を執らないプリブミを後進的・プリミティブ・無礼者・未開人などと評した。西洋的オランダ的でない落ちこぼれ階層に向けて、唇をゆがめて吐き捨てる

ように言う「地がムラユだからな、おまえは」は「この田舎者めが」と同じ意味の揶揄や侮蔑を表した。これは明らかに音楽嗜好とは無関係の、本来たいした意味のない問題が生んだ過去のトラウマである。そして、明日が来ようともこの傷が癒える気配をわれわれは感じる事ができないのだ。

ムラユ-ジョゲツ-ガンブスから出来上がったダンドウツ音楽が、Bintang Radio の中で情報省が構築した民族文化の柱から外されてマージナルな領域に最初から置かれていた理由もそれと同じなのである。その状況はいつまでも継続され、維持され続けている。その差別のゆえに、その存在への認知に関するある種の怨恨がダンドウツ音楽者層にまとわりついていることをわれわれは理解することができるのである。民間テレビ番組のひとつクイズダンドウツを見たことのあるひとは、司会者がいかに次の表明を繰り返して述べているかに気付いているだろう。「ダンドウツがカッペ音楽だなんて、とんでもない！」

本論はその現実から脱け出す道を示すものではない。これから述べるものが、クロンチョンであれダンドウツであれ、理性が生み出したもの以上に直観的な文化融合の結果生じた大衆娯楽音楽の価値をいかにして永続させるかという問題についてのひとつの見解として期待されうるものであるなら、その鍵はそれを解釈した上で書かれた作品つまり文章媒体としての作品を作り出す次世代のリベラルな意欲に委ねられているとわたしは言おう。人はそこで旋律と対旋律、リズムと律動の摩擦、ハーモニーとコードのコントラストに調和させる鋭さなどの一体性を吸収し、全種のスコアに対する意識のクオリティを考慮に入れながら意識下の現象に支えられた感覚器官の機能を分析し、最終的に美への衝動と倫理の実現のはざまに至るのである。

現時点の問題は、その現実から生まれた、使命感を抱いて全精神を、つまり理性を総動員してリベラルの枠の下に向けさせる次世代のインドネシアの作曲家が存在するかどうかという点にある。なぜなら、未来の民族を楽しませて当然の、批判に耐える芸術のあり方は、道具扱いしようとする政治権力者のえこひいきを含んだ支配権力というものに抑圧されない真の自由がある場合、要するにリベラルである時にのみ可能なのだから。[完]

「クロンチョントウグ(1)」(2021年02月19日)

クロンチョンの歴史は1661年にさかのぼるとひとは言う。オランダVOCがポルトガルの東南アジア前進基地だったマラッカを1641年に陥落させてから捕虜のポルトガル兵を奴隷にしてバタヴィアに連れて来たのが発端だったそうだ。ポルトガル兵というのは人種的にメスティーソと呼ばれるポルトガル人とアジア人との混血者、あるいはポルトガルが占領したインドのゴア・マラバル・コロマンデル・カリカット・セイロンなどの原住民で、一旦奴隷にされてからカトリック教徒になることを条件に奴隷身分から解放されたひとひととその子孫から成っており、かれらはアジアのポルトガル植民地で純血ポルトガル人に同化して植民地運営に参加し、ポルトガル文化の下で植民地生活を営んだひとひとだった。

ポルトガルという小国が人的資源に大なる不足を抱えていたのは周知のことであり、アフリカ～アジアに渡洋進出して作った占領地で地元の女に子供を産ませ、ポルトガル文化の中で育ててポルトガル人としての意識を植え付け、そのメスティーソを使って不足している人的資源を補うことがポルトガルの国是とされていた。東洋の果ての小国ではきっと想像もつかないような人種観・民族観だったにちがいない。ポルトガルの世紀の半ばごろには、ポルトガルの軍事要塞にいるのは将校級だけが純血ポルトガル人で、兵員は全員がメスティーソと解放奴隷であるとか、軍船の船長一人だけが純血ポルトガル人で乗組員全員がメスティーソと解放奴隷であるというような例が多々出現したとのことだ。

ポルトガル植民地では自由人だったかれらがオランダ人との戦争に敗れて捕虜になったとき、こんどはオランダ人の奴隷にされた。バタヴィアに連れて来られたのは、バタヴィアの都市建設のための労働力が必要とされていたためでもある。

オランダ人もプロテスタント教徒になることを条件にしてかれらを奴隷身分から解放したが、あくまでもプロテスタントへの改宗を拒否する者たちはフローレス島に送り込まれた。バタヴィアでカトリック教は禁止されていたのである。バタヴィアでその禁教が解かれたのはダンデルス総督の時代だ。つまりその時フランスの領土になっていたのだから、カトリック禁止が捨て置かれるわけがなかった。

自由人になったポルトガル系のマーダイカーたちは、バンダ人など同じキリスト教徒と結婚した。1661年になって、バタヴィアのキリスト教会がヨアン・マーツアイカー Joan Maetsuyker

第12代VOC総督の許可を得てかれらを新天地に送り出した。とは言っても、豊穡な約束の地がバタヴィア周辺にあったはずもなく、バタヴィア城市から20キロほど南東に離れた湿地帯の中の土地がかれらに与えられた。そこは人間を襲う野獣がおり、マラリア蚊の巣窟でもあった。それについて、宿敵ポルトガルの奴隷はそこでゆっくりと全滅せよという目論見でオランダ人がしたことだ、とコメントする現代インドネシア人もいるのだが、まあ、そう単純なものでもない。

そのとき、新天地に向かったのは23世帯150人のメスティーソ Mestiezen だったとVOCの記録に残されている。かれらが新しいキリスト教徒コミュニティを作った場所はトゥグ村 Kampoeng Toegoe と呼ばれた。その地名がトゥグとされた背景を物語るいくつかの説がある。

もっとも有力なものはジャカルタ都庁が支持しているこれだ。現在の北ジャカルタ市チリンチン郡西スンプル町トゥグ村のトゥグという地名は、西暦紀元450年ごろにタルマヌガラ Tarumanegara 王国のプルナワルマン Purnawarman 王がその地域でチタルム川の治水事業を行ったことを記念する高さ1メートルほどの卵形の石碑が建てられていたことに由来している。トゥグとは1878年に発見されたその石碑を意味しており、石碑は発見された場所から1911年に西ムルデカ通りにある今の国立博物館に移された。[続く]

「クロンチョントウグ(2)」(2021年02月22日)

パラワ文字で記された5行の碑文はプルナワルマン王の行った運河建設工事を讃える内容で、チャンドラバガ(現在のブカシ川)とゴマティ(現在のチャクン川)を結ぶ全長11キロの運河が作られ、この運河はタルマヌガラの王宮の前を通過してジャワ海まで水を導いた。洪水対策と同時に水田への灌漑が目的だったと考えられている。だが自然の猛威は人間の努力を小ばかにするかのよう、はるかに大規模な洪水を送りつけてタルマヌガラ王国を崩壊させた。

であるなら、1878年に石碑が発見される前、ポルトガル系マーダイカーコミュニティが開拓して住んだ土地の名前は一体何だったのだろうか？2百年以上も別の名前と呼ばれていたものが、石碑が発見されたために突然トゥグという名前に変更されたのなら、旧名がなんらかの

記録に残っていないはずだ。

別の説では、土地境界標識(塚＝オランダ語 paal)のことだというもの、あるいは目印の大石のことだというもの、更には相当にひねったものとして Portuguese の真ん中の四文字-tugu-を取ったというようなものまで、百花繚乱になっている。

1661年にかれらが開拓したトゥグ村は、周辺のムスリムプリブミ居住地域からだいぶ離れていたのではあるまいか。だからこそ、バタヴィアの教会がそこを推奨したように思われる。もっと後の時代になってトゥグ村のことをバタヴィアのプリブミ庶民はキリスト教徒の土地タナスラニ tanah serani と呼ぶようになった。近隣をムスリムの村々で囲まれていれば、そんな呼び方はなされないだろう。

ちなみにスラニとはアラブ語でキリスト教徒を指す nasrani に由来しており、アラブ語ナスラニの語源はイエス・キリストが幼少期を過ごしたナザレだそうだ。

プルナワルマン王の石碑が発見された場所はタンジュンプリオツの東側で現在のトゥグ村の南にあるトゥグバウトウンブ Tugu Batu Tumbuh 村の域内であり、現在はスカプラ～クラパガデン大通りのど真ん中になっていて、大型車両が右往左往している産業道路のいったいどこに石碑が立っていたのか、まるで分からないのが実情だ。

それはともかくとして、マーダイカーコミュニティが新しい村を起こしたとき、その地域先住の地元民はプルナワルマン王の石碑のことを昔から知っており、しこうしてその土地をトゥグと呼んでいた可能性をわたしは感じるのである。1878年に石碑を「発見」したのはオランダ人だけで、地元民たちにとっては「何をいまさら」ということだったのではないだろうか。であるなら、それは世界のディスカバリー物語とまったく同じロジックになる。インドネシア人が西洋史観で自分の歴史を書くようなことなど、しないでほしいものだ。

バウトウンブという言葉がそれを裏書きしているように私には思われる。見映えのするプルナワルマン王の石碑を地域内の先住者たちはバウトウンブと呼び、それを聖なる力を持つ物体として礼拝の対象にしていたという話もインドネシア語情報の中に見つかる。異教徒解放奴隷がやってきて開拓を行う何百年も昔から、域内先住者たちは既にその石碑を発見していたのである。その石碑をトゥグという言葉に結びつけるのであるなら、オランダ人が石碑を「発見」する前から地名は既にそうになっていたと考える方が自然ではあるまいか。

移住した23世帯のプロテスタント教徒マーダイカーたちは、そこで生活を始めた。宗教行為はメルヒオル・ライデカー牧師 Ds Melchior Leydecker がバタヴィアから派遣されて常駐し、統率した。この牧師は医薬分野の専門家だったそうだ。礼拝はポルトガル語で行われ、またマーダイカーコミュニティの生活指導にも尽力したことから、この牧師がカンプントウグの建設者と呼ばれることもある。カンプントウグに教会が建ったのは1678年で、その木造の教会には学校が併設されてコミュニティの子供たちが通った。それがジャカルタで最も古い学校だと言われている。[続く]

「クロンチョントウグ(3)」(2021年02月23日)

現在建っているトゥグ教会は石造りのもので、これは1748年7月28日にオープンされた。その再建工事はスネン市場やタナアバン市場を作った大金持ちの地主ユスティヌス・フィンク Justinus Vink が行ったようだ。かれはチリンチンの地主でもあったそうで、どうやらその縁でフィンクがトゥグコミュニティにその教会を寄贈したように思われる。

正確に言うなら、現在の教会建物は三代目に当たる。最初の木造のものが朽ちたために1738年に新しい教会に建て替えられたが、華人大虐殺事件が起こって華人武装集団が建物を焼き討ちしたために、使えなくなってしまった。フィンクがそれに代えて、そこから少し離れた場所に新しい教会を建てたというストーリーが語られている。

トゥグ教会はライデカー牧師が最初に建てて以来、バタヴィアのプロテスタント教団の統率下に置かれたらしく、代々の牧師はバタヴィアから派遣されている。つまりは、マーダイカーコミュニティが自由放任されたのでもなければ、勝手に全滅せよという悪意で島流しされたのでもないということをその一事が証明していると言えるだろう。為政者にとっての必要な「ひも」は、そのような形でしっかりと結わえられていたように見える。

ライデカー牧師はトゥグでの生活中にオランダ語聖書のムラユ語への翻訳を始めた。かれがそれを行ったのは、ポルトガル語で行われている礼拝をムラユ語に変えるためだったようだ。

カトリックの観念を引きずっているポルトガル語がオランダ式プロテスタントの礼拝にいつまでも使われていてはいけないということだったのか、それともそのうちに後継の牧師がポルトガル語での礼拝の統率に難をきたすことを懸念したのか、いずれにせよトゥグ教会での礼拝言語はムラユ語に変わって行ったのである。しかし住民の生活言語を変更させるようなことはまったく行われなかった。インドネシア共和国が独立し、トゥグ村が多民族多宗教の外部者国民を受け入れるようになって、20世紀後半が半ばを過ぎるころまで、マーダイカーコミュニティの生活言語はアジア版ポルトガル語が継続していたことを現存している子孫たちが物語っている。

1701年3月にライデカー牧師が生涯を閉じたとき、ムラユ語聖書の翻訳はまだ終わっていなかった。かれを後継したペトルス・ファン・デ・フォルム牧師 Ds Petrus van de Vorm がその業を引き継いで、その年のうちにムラユ語聖書を完成させた。

トゥグコミュニティでは、誕生した当初からアジアのポルトガル植民地で使われていたポルトガル語が生活言語になった。その言語は16世紀を通してアジアに構築されたポルトガルの通商ネットワークで使われる主要言語になり、アジアのリングフランカのひとつになっていた。ムラユ語はもちろんもっと古くから東南アジア海洋世界でのリングフランカだった。

異人種異民族と接触する人間は太古から複数の有力な言葉を操るのが当たり前だったのがある。バベルの塔の罰など、そんな人間どもに何ほどの効き目があったと言うのだろうか。その罰を与えた神はそれほどまでに人間というものを知らなかったのだろうか？ 多重言語能力というものは環境が培うものであり、本人の才能や勉強努力などは最終決定要因にならないのだという本質を実感できないモノカルチャーの視点がそんな話を生み出したように私には感じられる。マルチカルチャー人間は異文化異言語の他人をエトランジェにしない。[続く]

「クロンチョントウグ(4)」(2021年02月24日)

バタヴィアの開祖、ヤン・ピーテルスゾーン・クーンでさえ、バンテン時代にかれの盟友になった華人社会の有力者ソウ・ベンコン Souw Beng Kong との会話はアジア版ポルトガル語で行

っている。ソウ・ベンコンはバタヴィアの華人社会を統率するカピテンチナの初代を務めた。バタヴィア城市が開かれてからかなり長期にわたってアジア版ポルトガル語がバタヴィアにおける生活言語のひとつになっていた。アジアの至る所から集められた奴隷たちとの意思疎通がムラユ語一本で可能だったはずもあるまい。

トゥグコミュニティでの生活言語がポルトガル語からムラユ語へ変化して行ったはじまりは1930年代だった。その後の世代は徐々にポルトガル文化から離れて、きれいな言い方をすればコスモポリタン文化、耳ざわりの悪い言い方をすれば雑種文化への傾倒を強めて行った。そして20世紀末には、ポルトガル語を話せる者がひとりもいなくなったのである。

クリスチャン最大の祭りであるクリスマスになると、コミュニティのひとつとは互いの家を訪問し合い、ポルトガル語の口上を述べるのが礼儀作法のひとつだった。その口上は次のような文句になっている。これはポルトガル語の音をインドネシア語表記で書いたものであり、ポルトガル語の達者な方はその音からポルトガルの原語を想像して内容を解釈できるかもしれない。しかしこれは疑いもなくアジア版ポルトガル語だろうから、果たして意味が取れるかどうか。

Pisingku dia di Desember, nasedu di nos Sior jamundu Libra nos pekader unga
 ananti dikinta ferra asi klar kuma di dia unga anju di Sior asi grandi dialler-
 gria. Asi mow bosso tar. Dies lobu Sua da bida cumpredae lampang kria so podeer,
 Santu justru.

昨今のクリスマスにトゥグを訪れても、もうその口上は聞かれないそうだ。

同じように、クリスマスイブには深夜に若者たちがクロンチョンを奏でながら家々を訪問する風習があった。各家の年寄りに挨拶をして回るのである。しかし1986年にその風習は終わりを迎えた。トゥグ村の領域内に外部者が土地を買って住む現象がますます勢いを増し、トゥグコミュニティの人間が反対にブカシやプジャンボンに引っ越すケースが増加したのだ。クリスマスを祝わない隣人たちが寝静まっている中、クロンチョンを奏でながら賑やかに夜道を歩き回ることを先住者の権利としなかったかれらの憤りはさすがすがしいものと受け止めてよいように思われる。

しかし、クリスマスに先祖の墓参を行うトゥグ村の習慣はなくなる。マーダイカーコミュニティのひとつは昔から、深夜にトゥグ教会の墓地に詣でて先祖の供養を行ってきた。この習慣がポルトガル文化のものであったとは思えない。カトリック教徒の墓参日は違う月だからだ。どうも純然たる西と東の文化融合がこの習慣を生んだように思われるのである。ちなみに、総面積2千平米のトゥグ教会の墓地にはトゥグ村を開いたマーダイカー第一世代も眠っている。

バタヴィア城市とトゥグ村は地理的にかなりの距離があって、交通の便が悪かった遠い昔のことを思えば、島流しだの、自滅するように遠隔地に捨てたなどの想像が湧くのも無理はないかもしれないが、実際にバタヴィア城市とトゥグ村間の交通は、それほど不便なものではなかった。

バタヴィア城市北部のバタヴィア港(今のパサルイカン)から船で東のチリンチンに向かい、ムアラマルンダ Muara Marunda からチャクン川 Kali Cakung の河口に入って遡行し、しばらく行けばトゥグ村に至ることができたのである。トゥグ村の中を流れるチャクン川にはたいてい船がもやっていて、村人が漁をするときも川漁ばかりか海まで出てタンジュンプリオツ近辺で海漁することも頻繁だった。[続く]

「クロンチョントウグ(5)」(2021年02月25日)

トゥグ教会はチャクン川に面して建てられており、1940年代ごろまでバタヴィア住民がトゥグ教会で結婚式を挙げるために船を運んでやってきていたという話もある。しかし1942年に日本軍政はチャクン川から船を追放し、トゥグとジャカルタ北部を結ぶ水上交通路を閉鎖してしまったそうだ。

その海路を取る交通の便利さを知らないひとが陸路の不便さを見て島流し論を打っていたのかもしれない。陸路を経る場合は、バタヴィア城市の東側に作られたメステルコルネリスに向かう街道を通る。街道を南下してメステルコルネリスに達したあと、東に折れてさらに北上し、チャクンに出てから北西に7キロほど逆戻りするという遠路を越えなければならなかったのだ

から。

トゥグ村のマーダイカーコミュニティは最盛期に6百世帯ほどあったそうだ。かれらは長い歴史の中で、19世紀末までコミュニティ内の別ファミリーとしか結婚することが許されなかった。先祖代々のモノカルチャーを固持していたようだ。

20世紀になってトゥグ村の生活環境が変化するようになり、村民の生活領域も広がったことから、マナド・アンボン・ティモール・ジャワ・華人プラナカンなど同じキリスト教徒を配偶者に持つ機会が増加した。結果的に外見的な肉体上の特徴が一般的なインドネシア人と類似のものになっていき、見ただけではトゥグ村の人間かどうか分からないようになってしまった。

6百世帯の三分の一はその後、イリアンや西ジャワ・東ジャワなどに移住した。スカルノレジームが行った西イリアン解放戦争でオランダ領ニューギニアがインドネシア共和国に移管されたとき、イリアン在住のトゥグ村マーダイカー出身者たちはインドネシア国民になるか追放されるかの選択を余儀なくされた。インドネシア共和国完全主権承認でKNILのプリブミ兵士に起こったのと同じことが繰り返されたのである。かれらはプリブミからの敵視を恐れ、オランダに移住してインディシュの一部になった。

今では、トゥグ村の伝統コミュニティに所属する世帯は200軒足らず、またトゥグ村の外に出て行った世帯は230軒程度になっている。おまけにトゥグ村開拓時代以来、村の中心になっていたトゥグ教会の近辺は、今そのエリアはスンプル Semper 五差路からチャチン Cacing 大通りまでの領域になっているのだが、そこに残っている一族はほんの数えるほどしかない。元々かれらは接近して集落を作らなかったから、その間のスペースが新来者によって埋め尽くされてしまったと言えるだろう。

4百年近くも生き残ったひとつの種族としては、このトゥグマーダイカーコミュニティの人口数は予想外に小さいものだ。トゥグ村はすでにインドネシア共和国の国是そのままに多様性の支配する土地になっている。何世紀にもわたってスラニの地だったトゥグ村も、国民であるさまざまな種族が入り混じって住む土地に変貌せざるをえなかった。そこを住処にしてきたマーダイカーコミュニティは、今や十万人を超える南北トゥグ町の住民人口の中で完全なマイノリティになっている。

トゥグ村がポルトガル系マーダイカーの村だった時代は、インドネシア共和国独立と共にそのようにして終わった。共和国は、特定人種種族がエクスクルーシブなカンブンコミュニティを作ることを最初から否定した。全国民は文化言語がどう違っていようが、すべて平等同等の国民として混じり合って暮らさなければならないのである。こうして、キリスト教徒の土地トゥグは徐々に徐々に、ムスリムプリブミ住民がマジョリティを占める方向へと変化して行った。村を挙げてクリスマスイブを祝うことはできなくなってしまったのだ。[続く]

「クロンチョントウグ(6)」(2021年02月26日)

現在のトゥグコミュニティがポルトガルの子孫であることを住民たちの姓が証明しているとして七つの姓がよく引き合いに出されるのだが、Quiko, Michiels, Andries, Browne, Cornelis, Abraham, Solomon は本当にすべてがポルトガル系の姓なのだろうか？

かつてトゥグ村マーダイカーコミュニティにはもっとたくさん一族がいた。過去にあった Parela, Marcos, Mayo, Hendriks, Seymons, Da Costa などの姓は今や絶えてしまった。男児を得られなかった家は、娘たちを同郷の他の一族、あるいはマナド人やアンボン人の一族の嫁に送り出すと、その一家の姓を継ぐ者がいなくなる。長い歴史の中で、そのようなできごとが時々起こったという話だ。

トゥグ村第一世代の23世帯は広大な土地の中に自分たちの生活基盤を設けた。それぞれの一族は互いに離れた場所に家を建てた。隣のファミリーの家は4キロも離れ、その間を種々の畑や森、空き地などが埋めた。

日々の暮らしは農耕・狩猟・漁労をメインにし、狩猟はイノシシ狩りを行った。最初は村の域内で狩りが行えたようだが、19世紀末ごろになると遠出をしなければ獲物を得ることができなくなり、そのためにウジュンクロンやタンジュンカランまでイノシシ狩りに出かけたそう。腕のいい鉄砲猟師が少なからずいたのだろう。

かれらはイノシシ肉で塩とウガラシ味の干し肉 dendeng を作った。デンドントウグは人気のある商品になったが、いかんせん、ムスリムプリブミが競って買うような品物ではない。かれら

はカンブクマヨラン Kampoeng Kemajoran まで製品を売りに出かけた。クマヨランのオランダ系 Indo が顧客になったようだ。クマヨランへ行くには、トゥグから船で海に出て、海岸沿いにタンジュンプリオツまで行き、上陸してから鉄道に乗ってクマヨランへというルートを通った。

そのデントゥグは既に昔語りになってしまった。しかもかなり古い時代に。遠出しなければ獲物が手に入らないのなら、すでに商業ベースから外れている。おまけに、ずっと以前にかれらの狩猟は困難な状況になっていたのだ。日本軍政期にかれらの狩猟銃はすべて没収されたのだから。

漁労はチャクン川や海へ漁に出かけて行き、獲れたものはすべて自家消費された。トゥグの名を冠した食べ物はデンデンの他にドドル Dodol やガドガド Garo-gado もあり、かつてはバタヴィア住民の間で知られた食べ物だったが、デンデンと同様にドドルも作られなくなり、ガドガドは各一族の家庭料理の中に隠れてしまった。

そんな日々の労働の合間に、かれらは音楽を奏で、歌を歌った。夜には若者たちが集まって愉しみ、あるいは祝宴の場を盛り上げ、そして無聊を慰めるためにクロンチョンが演奏され歌われた。教会でも、聖歌の伴奏はクロンチョンが担当した。オルガンがトゥグ教会に設置されるまで、クロンチョンは教会に不可欠な存在になっていた。

このポルトガル系マーダイカーコミュニティに音楽がしみついていたのは、やはりアジアの植民地生活にポルトガル文化が与えたものだったようだ。必然的にかれらが奏で歌う音楽はディアトニックのもので、モール音楽が旋法やリズムに影響を与えたにせよ、ポルトガル文化の土壌に咲いた花だったと言えるだろう。

クロンチョンという言葉の由来は一般にこう語られている。トゥグコミュニティの先祖たちは仕事の合間に音楽を愉しんだ。ずっと昔に使われた楽器は四弦小型ギターの Fforenga、三弦の Monica、五弦の Jitera で、それで奏でられる音がチュロン～チュロンと聞こえたことから最終的にトゥグで生まれたこの音楽の名称になった。[続く]

「クロンチョントゥグ(7)」(2021年03月01日)

使われる楽器はほとんど住民が手作りで制作した。村の周辺に生えているクナ〜ガ kenanga などの硬い木をよく乾燥させて楽器制作の材料にした。かれらはウクレレをクロンチョンと呼び、大小二種類のウクレレを作ってそれぞれを cakulele、cukulele と呼んだ。省略形が cak と cuk だ。あるいはクロンチョン1とクロンチョン2という呼び方もなされた。昔、弦はアンゴラ猫の筋が使われていたそうだが、近年では釣り糸が使われている。

19世紀末になるころ、かれらが作ったウクレレはパサルバルにあるティオ・テッホン Tio Tek Hong の楽器店で販売された。ウクレレをひとつ作るのにひと月かかったそうだ。

中部ジャワ州ソロのクロンチョン音楽家で作曲家でもあるアンジャル・アニ氏は、クロンチョン音楽はトゥグで生まれた音楽であり、ポルトガルに由来するものではない、と持論を語る。

ポルトガルには昔から今日に至るまで、クロンチョンあるいはそれに似た言葉で呼ばれる音楽は存在しない。また旋律やリズムやコード進行の面でクロンチョン特有の音楽的特徴を持つポルトガルの音楽ジャンルも存在しない。ポルトガルのミュージシャンにクロンチョンを演奏させても、クロンチョンのこつをてほどきしてもらわないかぎり、クロンチョンらしいクロンチョンにならない。クロンチョンは間違いなくインドネシアで生まれたローカル芸術なのである。

クロンチョンにはクロンチョンブタウィがあり、クロンチョンスラバヤがあり、クロンチョンソロやスマランなどさまざまなスタイルがある。それらは各地元の性格が反映されたバリエーションである。バリエーションが生まれること自体が、いかにクロンチョンが進取的本質を備えているかということを証明している。

その地方ごとの差異は特に演奏者の技量とテイストを反映して変化して来た歴史があるのだが、現在ではそれらが混じり合ったものへと収束して行く傾向が顕著になっている。ジャカルタでソロスタイルの演奏が行われるといったことはもう当たり前ののだ。

スタイルの違いというのは、歌に関するものと楽団編成つまり楽器のバリエーションがもたらすもので、更には楽器の奏法も関係している。使われる楽器は時代の流れに合わせて変化し、その時代の彩りを音楽の中に反映させた。そのために1930年代以前の楽団編成に使われた楽器と現代クロンチョンの楽器は大きく異なっていて、古いクロンチョンは旧スタイルと呼ばれている。

クロンチョンのリズムはたいていの曲に合う。ポップス・ダンドゥツ・マンダリン・西洋ヒット曲などなんでも来いだ。クロンチョン曲の中にも系統がある。オリジナルクロンチョン曲・スタンブル

曲・ランガムクロンチョン・エクストラ曲・ランガムジャワ曲等々である。

クロンチョンは固有のスタイルを持っているために、クロンチョン音楽を作曲する際には拍数やコード進行がそれから逸脱しないように制限を受ける。作曲者の個性を注ぎ込める余地が制限されているとも言える。

オランダ時代にトゥグコミュニティは、毎年8月31日のヴィルヘルミナ女王誕生日の祝祭を村をあげて行った。催しの中には射的の腕比べもあり、狩猟自慢の村人たちが腕前を競った。クマヨランの Indo たちが少なからずその祝祭を愉しむためにトゥグへ遊びに来て、クロンチョン楽団と親交を結んだ。こうして、クマヨランにクロンチョンが移植されて行った、とクロンチョン楽団の老メンバーは語っている。

トゥグ村も本質は農村であり、大収穫の際には祭りが行われる。かれらは収穫の一部を教会に寄贈し、教会がそれを売って教会活動の資金に当てる。大収穫祭は8月に行われ、今でも射的の腕比べは毎年行われているようだ。[続く]

「クロンチョントゥグ(8)」(2021年03月02日)

クマヨラン村はパサルスネンの外側にできた居住地区で、古い歴史を持っている。1950年代ごろまでオランダ系 Indo がたくさん住んでいて、一見してオランダ人に見える者が多かったために、プリブミはかれらを Belanda Kemayoran と呼んだ。クマヨランという地名の語源はカピテンチナの下でより狭い地区を担当するマヨールチナの地位名称に由来しているとのことだ。

クマヨランの Indo たちはプリブミを誘ってクロンチョンバンド・リフドゥヤファ Lief de Java を編成し、音楽活動を行った。リフドゥヤファは M Sagi, Isbandi, Ani Landauw, Benyamin S など、インドネシア共和国初期の音楽シーンで名を馳せたミュージシャンを輩出させている。クロンチョンにジャズの要素を盛り込んだリフドゥヤファはクロンチョンクマヨランの異名でも呼ばれ、コンサートやパーティと並んでラジオ放送局NIROMの音楽番組にもしばしば出演した。クロンチョンクマヨランの最盛期は1960年代ごろまでで、それ以後トゥグと並んでクロンチョンのもうひとつのメッカになっていたクマヨランから、クロンチョンのリズムは徐々に遠のいて行った。

1950年代になると、ジャワの都市部でクロンチョン楽団によるクロンチョン音楽が活発化した。その音楽はランガムジャワ langgam Jawa と呼ばれ、Sutedjo の率いる Keroncong Irama Langgam 楽団や Waldjinhah 率いる Keroncong Bintang Surakarta 楽団が名を挙げた。

さまざまなクロンチョンの名称の中にクロンチョントゥグ keroncong Tugu というものがある。クロンチョンの御本家であるトゥグのマーダイカーコミュニティが演奏しているクロンチョンという意味でその言葉が使われる。最初はギターやウクレレ状の小型ギターだけが歌の伴奏で、トゥグの祖先たちはチェロやコントラバスを使わなかった。他に昔から使われていたものに tambur や rebana があり、モール人の音楽との関りを想像させる。

その後の時代の流れに連れて演奏者が増加し、楽団の編成楽器はギター類に加えて、笛・太鼓・ルバナ・マンドリン・セロ・クンプル・バイオリン・トライアングルなどが増やされて行った。特にバスが使われるようになったのは20世紀に入ってからだ。

昔の演奏曲目は Moresco、Nina Bobo、Founga、Kafrioyo だけがレーパートリーだったが、その語イラマスタンプルやイラマムラユの曲目が追加されて行った。クロンチョンに関わるモリツコ mourisko という言葉の mour/moor とはモロッコを指し、isko は楽団を意味していたという説もある。

1960～70年代にクロンチョントゥグの存在を世に知らしめたのがオルケスクロンチョントゥグだった。この楽団はジョセフ・クイーコのメロディギターを筆頭に、フランス・アブラハムが第二ギター、ヤコブス・クイーコがバイオリン、アーレント・ミヒエルスがチェロ、オパ・ワアスがマンドリンと歌、アテン・ソパヘロカンがクロンチョン1、サムエル・クイーコがクロンチョン2、フェルナンド・クイーコがルバナ、エルピト・クイーコがトライアングル、そして女性歌手はオマ・クリスティネとオマ・ワアスというメンバーから成っていた。

この楽団の全盛期だった1972年、フランス国籍のベトナム人が楽団を訪れた。自分はユネスコから派遣された者で、「伝統芸能の記録資料のためにクロンチョン音楽を録音させてほしい。決して商業化するためのものではない。」と言う。楽団は二つ返事で了承し、アーレントの家で録音が行われた。そのとき、かなり多数の曲が録音された。

1974年、アーレントがオランダに住む弟を訪問したとき、クロンチョントゥグ楽団のレコード

がシリーズで発売されていることが話題になった。アーレントは不思議に思った。そんなことをした記憶はないのだから。ひょっとして、誰かが名前を騙って録音したものではないだろうか。
[続く]

「クロンチョントウグ(9)」(2021年03月03日)

アーレントはレコード屋へ行って問題のレコード盤を25フルデンで買い求めた。ジャケットにはかれの楽団の写真が大きく掲載され、Hallo-hallo Bandung, Bintang Surabaya, Oud Batavia, Surilang などの収録曲のタイトルと第13巻という文字が踊っていた。そして音を聞いて、そのレコードは楽団の名前を騙ったものでなく、正真正銘の自分たちの音楽であることが明らかになったのである。フランス国籍のベトナム人が詐欺師であったことが判明した。

アーレントはすぐに弁護士を探してそのレコードの販売禁止手続きを取った。かれは1千フルデンをそのために出費した。インドネシアに戻ってから、アーレントは楽団仲間たちと相談してこの事件を裁判に持ち込もうとしたものの、動きがあまり進まないまま歳月が経過し、アーレントは1993年に60歳で世を去った。

それとは別に、クロンチョントウグ楽団詐称事件も本当に起こっている。1980年代にオランダで行われたトントンフェスティバルで、クロンチョントウグ楽団のステージがあるという宣伝を見たオランダ在住のアーレントの弟が、家族連れでステージを見に来た。

ところがステージ上でクロンチョンを演奏している楽団メンバーの中にアーレントもいなければ、他の楽団メンバーもいない。よく見ると、中にひとりだけトゥグコミュニティの者がいたが、かれはクロンチョントウグ楽団のメンバーではない。そして他のメンバーはすべてトゥグの人間でなかった。

弟はそのトゥグの者に、アーレントやクイーコはどうしたんだと尋ねると、「病気で来られなくなったんだ。」という返事だった。後になってその話を聞いたアーレントは、「その時期、オレはピンピンしていたぜ。」と弟に語っている。

当時の楽団は正当クロンチョンのスタンダード曲を採り上げて演奏し、数百年の伝統を持つクロンチョン音楽を愛好者に満喫させてくれた。しかし世代交代とともに、楽団にも変化が起こる。考え方の相違が楽団を分裂させることも起こる。

2005年にトゥグにはクロンチョン楽団が四つあった。Orkes Keroncong Cafrinho, OK Mourinho, OK Tugu, OK Tugu Ren Jaya がそれで、クロンチョンカフリーニョ楽団はヤコブス・クイーコが統率していたのを弟のサムエル・クイーコが引き継いだ。

カフリーニョ楽団はプロのクロンチョン楽団として活動しており、メンバーはトゥグコミュニティの者に限定していないために40人という豊富なメンバーを擁している。カフリーニョの第二グループ第三グループも編成可能であり、カフリーニョ楽団が離れている場所のステージで同時に演奏することさえ可能だ。

それと正反対なのがクロンチョントゥグ楽団だ。リーダーのアンドレ・ジュアン・ミヒエルスは実父アーレント・ジュリンセ・ミヒエルスの遺志を継いで、伝統芸術クロンチョントゥグの保存に専心している。昔からトゥグのクロンチョン楽団はコミュニティメンバーだけで編成されていた。その伝統を維持するために、コミュニティ外のミュージシャンをメンバーに加えることをしない方針をとっていて、人の養成に重きを置いている。また、クロンチョン演奏を生計のために行わないことをモットーにしているため、メンバーは勤め人や自営業者あるいは学生などばかりだ。アンドレ自身も本業は自動車修理業やトラック配送業を生計の柱にしている。「演奏を依頼されれば、必ず受けますよ。」とアンドレは普段から述べている。ギャラの金額を見て受けるかどうかを決めるような商業主義はかれの生き方ではないのだろう。[続く]

「クロンチョントゥグ(終)」(2021年03月04日)

伝統を続けて行くために次世代楽団は不可欠であり、アンドレは自分の子供やコミュニティの若者たちを誘ってジュニア楽団を作り、伝統維持を絶対方針にしてクロンチョン音楽の指導育成に献身している。

リーダーのアンドレは1967年生まれ。カンプントゥグに定着したミヒエルス家の十代目の子

孫に当たる。かれの実父アーレント・ミヒエルスはクロンチョン楽団プサカモレスコトウグ Poesaka Moresco Toegoe の第二世代であり、その後1988年に分裂してクロンチョントウグ楽団を編成した。アーレントは伝統芸術の保存という理想を抱いていたようで、アンドレを含む子供たちによくこう言った。「クロンチョンを金儲けの道具にしてはいけない。クロンチョンを演奏するのは、クロンチョンに生命を与えて生き続けさせるためなのだ」。

しかし、古い昔ながらのクロンチョンを昔のスタイルのまま演奏していたのでは、やがて行き詰まる可能性は大きい。そのうちに、クロンチョンを聞きに来るのは若いころにクロンチョンになじんだ爺さん婆さんだけになり、ポップス音楽で育った若者が見向きもしなくなって時代から取り残されるのは目に見えている。クロンチョン音楽を伝統文化として生き残らせるためには、何かが必要だ。父親のやり方をただ真似ていてはいけない。アンドレはブレークスルーを真剣に考えるようになった。

かれの子供のころの思い出は、今のクロンチョン楽団のリーダーにそぐわないものだった。父親にとってクロンチョンは神聖なものだったようだ。小さい子供だったアンドレが父の楽器に触って音を出していると、父親が来てアンドレの手を引き離し、子供が遊ぶものじゃないと叱った。

毎週一回、楽団メンバーがかれの家に集まり、2～3時間練習をした。家のテラスで行われる練習を、子供たちは家の中からガラス窓を通して見ることしか許されなかった。休憩時に供される飲食物は普段のコーヒーでなくてマラガワイン *anggur malaga*、赤クレテッタバコ *kretek merah*、ケーキ類 *kue basah* だった。

アンドレの父親にとってクロンチョン音楽は大人の真剣勝負に似た思い入れの対象だったのかもしれない。大人の真剣勝負の場に小さい子供がウロチョロするのは、精神集中の妨げになると考えたのだろうか。結果的にアンドレは音楽演奏になじまないまま、ビジネスの世界にのめり込んで行った。

父親が新しい楽団を編成したのは、TVRIの音楽番組に出演したのが契機になった。そのとき、アンドレも他の兄弟たちと一緒に楽団に加わるよう求められた。だが十人兄妹の6番目であるかれはもう21歳になっており、父親のしつけのために楽器が身近なものになっておらず、本人の人生もクロンチョン音楽との関りに乏しいものになっていたのである。音楽でないさまざま

まなビジネスで辛酸をなめ、また優美な成功をも体験していたかれは、今度は父親を手伝うために音楽演奏の分野も手掛けるようになった。

クロンチョン楽団の活動を通して父親との接触が深まり、関係がますます緊密さを増して行った。父親がライフワークにしているクロンチョンのサバイバルを実現させるために、父親が努力している理想の実現のために、この自分が手を貸し、後押しするのだ。それが父親に対して自分が行える最大の親孝行ではないだろうか。

若者の心をクロンチョンに引き寄せなければ、先細りは明らかだ。アンドレは兄弟たちと共に国内外のロック音楽をクロンチョンに乗せて歌うことに知恵をしばった。

あるTV番組でオープニングとエンディングの生演奏にクロンチョントウグが招かれたとき、かれらはビートルズのオブラディオブラダを演奏して好評を博した。クロンチョンの持つ幅広い可能性のひとつが証明されたのである。それが新しいクロンチョントウグの旅立ちだった。[完]